ニヒリズムとニーチェの三概念

児　玉　正　幸

目　次

初　め　に
Ⅰ　詩人哲学者ニーチェ
Ⅱ　第一の光源：ニーチェの基本姿勢
Ⅲ　第二の光源：歴史的状況―忍び寄るヨーロッパのニヒリズム
Ⅳ　永劫回帰
Ⅴ　力への意志と超人

初　め　に

人間は誰しも形而上学的営為を運命付けられた動物である。又人間は誰しも歴史的動物である。人間は、己れが呱々の声を上げた時代の海に船出して、誰とも異なる独自の航海日誌を付けざるをえない歴史的動物である。詰まり、人間という精神の漂流者は、歴史を形成しつつ特定の時代を生きざるをえない歴史内実存なのである。その意味で我々は、ニーチェの思想に肉薄しようとするならば、ニーチェの生きた歴史的状況に通暁しなければならない。人は誰しも時代の波を被るからである。しかも一頭地を抜く知性に生まれついた者ほど鋭敏に時代の波に対処するからである。又もう一つ看過してはならない点は、ニーチェという自然の生み出した傑出した歴史内実存の特質である。言い換えれば、ニーチェの人生と世界に対する基本姿勢である。

以上の二つの視角から、私は以下、ニーチェ哲学の骨格を成す三つの概念（永劫回帰、力への意志、超人）の整合的解明を試みようと思う。

だがその試みを展開する前に、第一章では、ニーチェが例外者意識のもとに言語表現の粋を尽して内的欲求を吐露した傑作 „Also sprach Zarathustra" の哲学書としては特異な性格について、言及しておきたい。詰まり、ニーチェ哲学の主要な三概念が登場する該書が厳密な言葉で編成されていない理由は何か。ニーチェは何故に詩人哲学者として思想を詩Gedichtで伝達せざるをえないのか。この点を考察することから始めたい。

Ⅰ

Zarathustraという名は、拝火教教祖と目される預言者ゾロアスターの古代ペルシャ名である。１９世紀のツァラトゥストラも又、その名の示す通り、預言者である。１９世紀の預言者ツァラトゥストラは、魂の故郷と自称する孤独の中で己れと対話を交すことを好む。孤独に沈潜

すると、「ここ（孤独）では、一切の存在の言葉とその言葉の櫃とが、私に向かって突然開かれる。一切の存在が、ここでは言葉になろうとする。一切の生成が、ここでは語ることを私から学ぼうとする。[1]」とは言え、存在の深淵は底がなく、それは、抽象概念で語り明かそうとしても意を尽せない程に深い。測り知るには余りに「世界は深い — 昼が今までに考えていたよりも深い。昼だからといって、一切が言葉になりうるわけではない。[2]」そういうわけで、「ここ（孤独）では、おまえ（ツァラトゥストラ）はあらゆる比喩に乗って、あらゆる真実へと向かう。[3]」ことになる。そういう次第でツァラトゥストラの書は、預言の書の常として、真理の予感に震える詩的象徴的表現形式にならざるをえない。

以上みたように、ツァラトゥストラは、存在の深淵を他に伝達しようとすれば比喩に頼らないわけにはいかない、と胸の内を語り明かしている。ところがそれにも拘らず、他方で、比喩を専門とする詩人達を仮借なく弾劾している。例えば次のように。「草地や寂しい山腹に寝そべって耳を欹てる者は、天地の間にある諸々のことについていくばくかを知る、とすべての詩人達は信じている。そして感情の籠った興奮がやってくると、詩人達はいつもこう思い込む、自然そのものが自分達に惚れ込んでいるのだと。詰まり、自然が自分達の耳元に忍び寄って、秘密の事柄や恋慕の甘い言葉を囁くのだと。そしてそれを万人に向かって自慢する。[4]」

ところが、このような詩人の思い上がりを痛撃する「ツァラトゥストラも詩人の一人である。[5]」一体これはどういうことか。なぜ詩人の弱点を知り抜いているツァラトゥストラが、己れの教えを厳密な概念で sprechen せずに、Gedicht で提示するのか。これが問題となる。該書の末尾には必ず「このようにツァラトゥストラは語った。Also sprach Zarathustra」とあるが、内容を総括する適切な言葉で締め括るとすれば、紛れもなく「このようにツァラトゥストラは詩作した。Also dichtete Zarathustra」としなければならない。この問題を解き明かそう。

ツァラトゥストラは自己憧着を犯しているわけでは決してない。ツァラトゥストラは、論理的表現を拒絶するぎりぎりの臨界点に立っているのである。ツァラトゥストラは、流動して止まない生の実相を表現する場合、自己に誠実であろうとすれば、比喩を散りばめた詩という乗り物に乗らなければならなかった。生の深淵を覗き見たツァラトゥストラは、それを抽象概念に高めて伝達することの己れの無力さを知り尽していたのである。ツァラトゥストラは、生の深淵の語ろうにも語れぬもどかしさに苛立ちを感じているのである。「詰まり、こういうふうに私が比喩で語るとは。私が詩人のように吃り、詩人のようにのろのろ歩くとは！私は本当に、自分がまだ詩人でなければならないことを恥ずかしく思う。 — [6]」ツァラトゥストラは、単に自然の懐に抱かれて神の声を聞きとるタイプの受動的詩人ではない。こういった詩人はツァラトゥストラの批判の対象となる。ツァラトゥストラは自分自身の内部に目を向け、徹底的に考え抜く自照の人、いわば詩人哲学者なのである。だから彼はこう自戒するのである。「誰かが本気で『詩人は嘘をつきすぎる』と口にすると仮定すれば、その人は正しいことを言っている。 — 我々は嘘をつきすぎるのだ。我々は又、知ることが余りに少ない、そして学ぶことも下手だ。それで我々はすぐ嘘を言わなければならない羽目になる。[7]」

但し、ここで注意しておかなければならないことがある。それは、一つには詩人哲学者ツァラトゥストラの理想とする境地であり、又一つにはツァラトゥストラはその境地に則り、「このようにツァラトゥストラは歌った。Also sang Zarathustra 」と己れの境地を絶唱したかった、という点である。即ち、精神の三様の変化（「汝なすべし Du sollst 」の駱駝 → 「我欲す Ich will 」の獅子 → 「我あり Ich bin 」の小児）を辿り、最終段階の小児の立場を志向する者として、ツァラトゥストラは、ディオニュソスの徒に相応しく、軽やかに理想の境地を歌い上げたかったのである。小児の立場＝ディオニュソス＝力への意志になりきる生き方を理想と仰ぐところに、ツァラトゥストラの知恵を捨てて軽快な生に走り、歌いたい根拠がある。それを裏付けるように、円熟した、ツァラトゥストラの双生児ニーチェ（より正確には、ツァラトゥストラを理想の分身とするニーチェ）は、ビゼーやモーツアルトを好み、ワーグナーを嫌う。この真理の使徒は、しかめっ面をしたドイツ精神が気に入らないのである。結局、ツァラトゥストラが還帰しようとする小児の立場とは、次のような立場である。「すべての重いものが軽くなり、すべての肉体が舞踏者に、すべての精神が鳥になることが、私の始めであり、終わりであるなら（mein A und O）、そして誠に、それが私の始めであり、終わりなのだ（mein A und O）！ — [8]」そういうわけでこうなる。「見よ、上もなく、下もない！おまえを投げよ、まわりへ、かなたへ、うしろへ。おまえ、軽快な者よ。歌え、最早語るな！ — 言葉はすべて重い者達の為につくられたものではないのか。軽やかな者にとっては、言葉はすべて嘘をつくことにならないか。歌え、最早語るな！ — [9]」

しかしながらニーチェは、ディオニュソスになろうとしてなりきれずに、道半ばにして斃れた。そこで該書は、ツァラトゥストラの苦闘の跡をとどめる白鳥の歌となった。

それでは初めの課題に帰り、次の二つの章では、先ずニーチェの哲学の骨組みに光をあてる二つの光源をそれぞれ考察していきたい。

II

ショーペンハウエルとの書物の上での邂逅を通して、真剣に人生と世界の本質を見極める哲学する精神を教えられたニーチェ。ニーチェの終生変わることのない標語は、「おまえがあるところのものになれ。Werde, der du bist ![1]」であった。「いかにして人は、そのあるところのものになるか。WIE MAN WIRD, WAS MAN IST 」（ECCE HOMO の副題）これ即ち自己還帰がニーチェの生涯の思索を貫く哲学上の課題であった。病苦と孤独が連綿と持続する中で、己れを実験台に、己れの内面と人生を厳しく見据えて自己貫徹するニーチェの哲学する精神を見落としては、画龍点睛を欠くことになる。この苛烈なニーチェの自己探求の精神を見過ごしては、ニーチェを読む資格はない。ニーチェの思索の根本姿勢を見極めることなしに、ニーチェの書物を読むことは危険極まりない。永遠に眼差しを注いで苦闘する哲学者ニーチェの根本精神に即して書物を理解せずに、漫然とニーチェの書物から人生の知恵を汲み上げようとすれば、

ニーチェの書物は危険を満載した有害な書物に変貌する。戦闘精神漲るニーチェの毒気にあてられて、正にニーチェの蔑む権力賤民（Macht-Gesindel）や天狗に成り下がるのが落ちである。そういう読者はニーチェを読む資格はない。「一切の書かれたもののうち、人が己れの血でもって書くものだけを私は愛する。血をもって書け。そうすれば君は知るであろう、血が精神であることを。人の血を理解するのは、たやすくできることではない。私は読書する怠け者を憎む。(2)」私が血でもって書き上げた著作を読む資格が諸君にはあるか、とニーチェは我々に問いかけている。私の著作を読むに値しない者には、私の著作はとんでもない誤解を招く、とニーチェは予告する。〝ALSO SPRACH ZARATHUSTRA〟の副題も次のように警告しているのを我々は思い起こさねばならない。「万人に与える書、何人にも与えぬ書。EIN BUCH FÜR ALLE UND KEINEN」

深まる病苦と孤独を跳ね返し、精神的破局を迎えるまで自己へ還帰することを己れに課したニーチェを導いたものは何であったろうか。それこそ、ニーチェの本体であるディオニュソスである。ニーチェの不退転の意志（選択決行能力）を包摂する広義の意志、即ちディオニュソスになりきろうとするのが、ニーチェの自己還帰の真意である。破壊と創造に戯れるディオニュソスとは、別名を「力への意志Wille zur Macht」と言い、「常に自分自身を乗り超えざるをえないもの(3)」であり、「その名を本来の己れSelbst という。君の肉体の中にかれが住んでいる。君の肉体がかれである。(4)」

以上に論述されたニーチェという歴史内実存に於けるディオニュソスの自己還帰が、多義的に解釈され続けたニーチェ哲学の骨格を浮かび上がらせる一つの光源である。

それでは次にもう一つの光源を探ることにしよう。

Ⅱ

ニーチェはニヒリズム概念を次のように定義している。「ニヒリズムとは何を意味するのか。— 最高の諸価値が無価値になるということ。目標が欠けている。『何故か』という問いへの答えが欠けているのである。(1)」

自己の生存に真摯であろうとすれば、誰しもニヒリズムとの格闘を回避するわけにはいかない。ニヒリズムは、己れだけの時間と空間を取り戻した実存的人間を訪のう招かれざる客である。ニヒリズムは又、危機に瀕した時代が必ず伴う暗い影法師でもある。その意味でニヒリズムは、実存する人間にとって、永遠の伴侶であると同時に、苦境に立つ歴史の落とす影でもある。

ニーチェが対決したのは外ならぬヨーロッパのニヒリズムであった。ヨーロッパのニヒリズムは、19 世紀以降、社会の変動に足並みを揃えて胎動を開始した。その予震を逸早く体感する秀抜な知性があった。ニーチェに先駆ける者達である。作家ではツルゲーネフやフローベル。詩人ではボードレールやランボー。哲学者ではショーペンハウエルやシュティルナーの名が挙げられる。両哲学者は、徹底的に闘うニヒリストニーチェの先触れと言える。ニーチェは、ヨーロッパ

の医師として、ほぼ20世紀に亘ってキリスト教に汚染されたヨーロッパに診断を下し、神の死亡診断書を作成する。「神は死んだ。今や我々は欲する ― 超人が生きることを。[2]」この表現に、ニーチェの取り組んだニヒリズムの入口と出口が示されている。「神は死んだ。Gott starb」とは勿論、キリスト教の神のことである。このキリスト教の神の信仰の上に既成の価値体系が築き上げられてきた以上、神の死は、従来の価値体系の崩壊に繋がる。詰まりニヒリズムの到来に直結する。そしてニヒリズムの克服者が超人Übermensch という。

今後2世紀に亘り、ヨーロッパがニヒリズムの波に呑み込まれるのは、「ニヒリズムそのものを既に自分のうちで最後まで生き抜いてしまった[3]」ニーチェにとって、不可避の運命であった。ニーチェはニヒリズムの接近する足音に耳を澄ます。「ニヒリズムが戸口に立っている。あらゆる訪問客のうちで最も薄気味悪いこの客は、どこから我々のところにやって来るのであろうか。[4]」

以上指摘したヨーロッパの精神状況と前章で指摘された自己還帰の二つの角度から、以下、時代の転換期に生きたニーチェという歴史内実存が悪戦苦闘の末に生み出した、議論の尽きることのない三教説を、統一的に解釈する試みを展開してみようと思う。前以て三つの教説の相互連関を簡単に纏めれば、次のようになる。永劫回帰 ewige Wiederkunft とはニヒリズムの極限形式で、これを超克するのが、生と世界の根源状態（無垢の生成）である力への意志 Wille zur Macht。この体現者が超人 Übermensch に外ならない。

それでは次に、それらの詳細な概念説明に移ろう。

Ⅳ

私は「自分を省みること以外にはこれまで何もしてこなかった[1]」ような人間だと自己を語るニーチェは、「ヨーロッパの最初の完全なニヒリスト der erste volkommene Nihilist Europas[2]」として、ニヒリズム到来の必然性とその克服の道（超人）を説く。

ヨーロッパに君臨する合理的世界観に疑義を呈し、ニヒリストニーチェの露払いを勤めた人物が出現していたことは、前章で既に指摘されたところである。その最たる人物は、無論ショーペンハウエルである。このニーチェの精神上の師は、盲目的生存意志を形而上学的原理に立てる立場からペシミズムを導来し、意志の絶滅に精進する聖者の道を理想とする。ところが不屈の意志力をもつ生過剰の弟子、ニーチェは、聖者の諦念に、「精神の力の衰退と後退としてのニヒリズム、即ち、受動的ニヒリズム[3]」を嗅ぎ付ける。そこで少壮気鋭のニーチェは手始めに、ペシミズム超克の書として、処女作『悲劇の誕生 Die Geburt der Tragodie 』を江湖に問う。だがニーチェにとって、ペシミズムはあくまでも「ニヒリズムの前形式 Vorform des Nihilismus[4]」に外ならず、円熟期のニーチェは、「ペシミズムの極限形式即ち本来的ニヒリズム die extremste Form des Pessimismus, der eigentliche Nihilismus[5]」を超克する指針を示す主著『Also sprach Zarathustra』を完成することになる。

それではニーチェの格闘するニヒリズムが何故ヨーロッパに襲来することになるのか。それは、

2千年に及びヨーロッパの支配者であり続けた「キリスト教道徳がキリスト教の神に刃向かう[6]」結果である。キリスト教道徳が陶冶した「誠実さ Wahrhaftigkeit」が己れの育ての親の首を締め上げるまでに己れの誠実さに徹する結果、ニヒリズムが招来されるのである。

もとを正せば、「道徳というものは、実際上のまた理論上のニヒリズムに対する、大きな対抗手段であった。[7]」従って、実は「或る全く特定の解釈、詰まりキリスト教的道徳的解釈のうちにこそ、ニヒリズムは潜んでいるのである。[8]」詰まりキリスト教道徳とは、生存の苦悩に人間を耐え忍ばせる為の一つの世界解釈であった。キリスト教道徳の淵源は、生存の苦悩から人間を解放しようとするイエスの救済意志に求められる。その目的から、キリスト教道徳は、生成界の彼岸に「真の世界wahre Welt」を虚構する必要に迫られた。詰まり生成には「目的 Zweck」も「統一性 Einheit」もないという洞察に到れば、今や「逃げ道として残るものは、生成のこの世界全体は迷妄だと判決を下して、この世界の彼岸に存する一つの世界を真の世界として虚構することであろう。[9]」だが「真の世界などは、一つの遠近法的仮象である。[10]」「こうした世界が組み立てられたのはただ心理学的欲求からにすぎず、人間はそうしたことをする権利などまるっきり持ってはいないという真相を知るに到れば、たちまち、ニヒリズムの最後の形式が発生してくる。[11]」それが、「精神の上昇した力の徴候としてのニヒリズム。即ち、能動的ニヒリズム。[12]」なのである。こうして「ニヒリズムの極限形式 die extremste Form des Nihilismus [13]」としての「永劫回帰 die ewige Wiederkehr」思想が誕生する。

『この人を見よ Ecce Homo』の中で、ニーチェは、1881年8月に永劫回帰思想を受胎した当時の経緯を思い起こしている。「人間と時代を越えた6千フィート 6000 Fuß jenseits von Mensch und Zeit [14]」の山中で閃いた「この最高の肯定の定式 diese höchste Formel der Bejahung [15]」である「永劫回帰の思想 der Ewigewiederkunfts - Gedanke [16]」とは、具体的にどのように理解されるべきものなのか。ツァラトゥストラの言葉に耳を澄ませてみよう。

静まり返った静寂の中で「瞬間という門 Torweg Augenblick」について思いを凝らすツァラトゥストラの胸に閃くものがある。「…。月光を浴びてのろのろと匐っているこの蜘蛛、またこの月光そのもの、また門のほとりで永遠の事物についてささやき交している私とおまえ — 我々は皆既に存在したことがあるのではないか。そしてみな再来するのではないか、我々の前方にあるもう一つのあの道、この長い空恐ろしい道をいつかまた歩くのではないか — 我々は永劫に再来するのではないか。 — [17]」ツァラトゥストラは我が身に襲いかかったインスピレーションに身震いする。その内容の余りの恐ろしさに戦慄する。我が身一人に限らず、あらゆる存在が予め決定された筋書き通りの生を生き抜かなければならないとは。しかもとこしえに。地球に己れが生誕し、世界と人生の謎を解き明かそうと営々と努める自己の生涯はかってあったし、これからも繰り返される。自分の一生は何から何まで全く同じ有様で無限に繰り返される運命にある。この想念に人はどうして嘔吐を催さずにいられよう。この永劫回帰を懐胎したツァラトゥストラにとって、それまでの直線的時間が俄に輪を描くことになるのは必定であった。「存在の円環は永遠に己れに忠実である。一瞬一瞬に存在は始まる。それぞれの『ここ』を中心として『かなた』

の球は回転する。中心は至るところにある。永遠の歩む道は曲線である。[18]」必然の定めのもとに生成の循環が永遠に続く。万物が必然の車輪に乗って回帰する生成界では、人間の自由な意思決定も絵空事になる。目新しいことは何一つない。すべて決められていたことだ。それでは歴史内実存は、自由とは永遠に無縁なのであろうか。否。ツァラトゥストラは自由人として超人を教える。万物の永劫回帰の思想の受胎時は嘔吐を催したツァラトゥストラも、新たに力を貯えて胸を張り、雄々しく己れの運命を生き抜く。「私は再び来る、この太陽、この大地、この鷲、この蛇と共に。 ― 新しい生、よりよい生、若しくは類似した生へ返るのではない。 ― 私は、永遠に繰り返して、最大のことに於いても最小のことに於いても同一のこの生に帰ってくるのだ。だから私は再び一切の事物の永劫の回帰を教えるのだ。 ― だから私は再び大地と人間との大いなる正午について語り、再び人間達に超人を告知するのだ。[19]」

では己れの運命としてツァラトゥストラが告知する超人とは何か。

V

ニヒリストニーチェにより、ヨーロッパに君臨し続けた最高権威が殺害され、それに伴い、既成価値の悉くが粉砕された。これは既に論及された。それならば神なき世界とはどのようなものであろうか。それはパスカルの予言、「キリスト教の信仰がなければ、自然や歴史と全く同様、君達は君達自身にとって怪物となり混沌となる」が成就された世界だという[1]。詰まり、それはこうだ。「 ― この世界は力への意志である ― そしてそれ以外の何物でもない！そして君達自身も又、この力への意志である ― そしてそれ以外の何物でもない！[2]」

神なき生と世界の本来の姿は力への意志だという。自己破壊と自己創造を永遠に繰り返す力への意志＝ディオニュソスは、善悪の彼岸にある。その意味でディオニュソス的生成は無垢となる。ニーチェが見た姿は、善悪を越えたディオニュソスの世界だったのである。神の殺害された後に大地に残された力への意志 ― これが、あらゆる価値を転換するニーチェの新しい価値基準となる。この新しい、これだけは相対化を免れている絶対の価値基準のもとでは、すべての価値が相対化される。力への意志が絶対の価値基準に据えられている点から判断すれば、力への意志は形而上学的原理と見做さなければならない。ニーチェが排除するのは、生成する事象の彼岸にあるとされる背後世界であり、事象の根源的事実である形而上学的原理は否定してはいない。

力への意志の遊戯衝動に基づく万物の永劫回帰は、免れることのできない必然の定めだという。となると偶発するかにみえる事象も実は必然の定めを担っている。ならば自由のはいり込む余地はないのか。必然の定めのもとに生成する事象の因果必然から免れる手段、即ち自由への道は拓けないのか。否。それは、存在論的自由の存する存在の深淵に身を投じることによって可能となる。即ち、生と世界の根源状態へ帰入することである。詰まり、力への意志になりきることである。そうすれば人は自由人になれる。そこで人は存在論的自由を獲得するのである。こうして人間に於いて因果必然と自由が和解する。これが超人の意味である。超人とは完璧な力への意志の

徒のことである。「人間は詩人であり、謎の解明者であり、偶然の救済者である。若しそうでなければ、私はどうして人間であることに耐えられよう。[3]」 神なき後偶然に生成するかにみえる無垢の事象を必然の相のもとに眺め、すべては前以て決定されていたことだ、「かってそうであった Es war[4]」 のは、「しかしそれがそうであることを私が欲したのだ！それがそうであることを私は欲するだろう — Aber so wollte ich es！ So werde ich's wollen —[5]」と、万物の永劫回帰を力への意志の立場から積極的に担うことによって、ツァラトゥストラは、生存の無意味を乗り越える自由への道を拓く。「おお、おまえ、私の意志よ！おまえ、あらゆる困窮の転回よ、おまえ、私の必然よ！[6]」 こう言って、ツァラトゥストラは力への意志に帰一しようとする。偶然とみえた困窮を起こるべくして起こった必然の困窮として積極的に担うから、そこに困窮の転回が起こり、主体は、力への意志そのものになりきった者として、自由の境地にはいる。ここでは自由と必然が渾然一体になる。偶然の出来事として過去に葬り去られた一切の出来事も、永劫回帰を積極的に担う立場から、ツァラトゥストラは眺める。「一切の『かってそうであった』は、一つの断片であり、一つの謎であり、一つの恐ろしい偶然である、 — 創造する意志が、それに対して、『しかし私はそれがそうであることを欲したのだ！』と言うまでは。 — 創造する意志が、それに対して、『しかし私はそれがそうであることを欲するのだ！それがそうであることを私は欲するだろう！』と言うまでは。[7]」 私が生まれたことも、私が歩んだ道も、これから歩む道も何から何まで決定事項であるばかりか、同一の生き様が一点の狂いもなく未来永劫に亘って繰り返されるのも決定済みという永劫回帰の思想にたじろがず、「これが生だったのか。War das das Leben ？ よし！ Wohlan！ もう一度！ Noch einmal！[8]」 と言って哄笑できる運命愛の徒が、超人の意味である。

「大地の意義 der Sinn der Erde[9]」 とされる「超人 Übermensch」 とは、前段で概念規定されたように、あくまでも完全な力への意志の徒のことである。ディオニュソスへの自己還帰を達成する実存の象徴、近代機械化社会の中で自己喪失する実存が本来の自己に立ち帰る象徴が、超人の謂である。

だがここで注意しなければならないのは、超人とは心構えを問題にした概念であって、肉体的卓越者とは直接の関係をもたない点である。「超人 Übermensch」 概念が心構えに限定された意味内容をもつということは、その対立概念である「末人 der letzte Mensch」 概念の規定からも裏付けがとれる。末人とは「最早自分自身を軽蔑することのできない、最も軽蔑すべき人間[10]」 のことである。詰まり末人とは、自らを高遠な理想に向けて憧れの矢と化することのない、近代文明の生み出した、創造意欲を欠く、生産性のない教養俗人を意味している。

だがニーチェは、超人になろうとして最後までなれなかった。肉体は舞踏者に、精神は歌う鳥になろうとして、結局はなりきれなかった。ニーチェは、超人の 22 世紀出現を預言して、己れの使命を完遂したのである。

注

Ⅰ. (1) Friedrich Nietzsche, Sämtliche Werke. 12 Bde (Alfred Kröner Verlag Suttgart), Bd. VI : Also sprach Zarathustra, Die Heimkehr, S. 204, 括弧内訳者

(2) ibid., Vor Sonnenaufgang, S. 183

(3) ibid., Die Heimkehr, S. 203, 括弧内訳者

(4) ibid., Von den Dichtern, S. 139

(5) ibid., Von den Dichtern, S. 138

(6) ibid., Von alten und neuen Tafeln, S. 218
ツァラトゥストラが自分がまだ詩人でいなければならないことを恥ずかしく思うのは何故か。それは、ツァラトゥストラの目指す理想が言葉を捨てた超人だからである。ツァラトゥストラはまだ真理（ディオニュソス）の体現者ではない。即ち己れの高く掲げた理想の超人になってはいない。詩人の段階までにしか登ることを許されていない己れの運命を確認し、それを恥じているのである。

(7) ibid., Von den Dichtern, S. 139 39

(8) (9) ibid., Die sieben Siegel (Oder : Das Ja-und Amen-Lied), S. 257

Ⅱ. (1) ibid., Das Honigopfer, S. 263

(2) ibid., Vom Lesen und Schreiben, S. 41

(3) ibid., Von der Selbstüberwindung, S. 124

(4) ibid., Von den Verächtern des Leibes, S. 35

Ⅲ. (1) Bd. Ⅸ : Der Wille zur Macht, S. 10

(2) Bd. Ⅳ : Also sprach Zarathustra, Vom höheren Menschen, S. 318

(3) Bd. Ⅸ : Der Wille zur Macht, S. 4

(4) ibid., S. 7

Ⅳ. (1) Bd. Ⅸ : Der Wille zur Macht, S. 3

(2) ibid., S. 4

(3) ibid., S. 20

(4) ibid., S. 12

(5) ibid., S. 82

(6) ibid., S. 7

(7) ibid., S. 11

(8) ibid., S. 7

(9) ibid., S. 14

(10) ibid., S. 17

(11) ibid., S. 14-15

(12) ibid., S. 20

(13) ibid., S. 44

(14) (15) (16)

Bd. VIII : Ecce Homo, Also sprach Zarathustra, S. 370

戦慄すべき、等しきものの永劫回帰の思想が最高の肯定の定式に転換するのは、その思想を進んで我が身に取り込むことによって達成される。このことは次章まで読み進むことによって理解されるはずである。

(17) Bd. VI : Also sprach Zarathustra, Vom Gesicht und Rätsel, S. 174

(18) ibid., Der Genesende, S. 241

(19) ibid., Der Genesende, S. 245

V. (1) Bd. IX : Der Wille zur Macht, S. 62

(2) ibid., S. 696-697

(3) Bd. VI : Also sprach Zarathustra, Von der Erlösung, S. 153

(4) (5) ibid., Von alten und neuen Tafeln の 3, S. 219

(6) ibid., Von alten und neuen Tafeln の 30, S. 238

(7) ibid., Von der Erlösung, S. 155

(8) ibid., Vom Gesicht und Rätsel, S. 173

(9) ibid., Vom Übermenschen und vom letzten Menschen の 3, S. 9

(10) ibid., Vom Übermenschen und vom letzten Menschen の 5, S. 14

(こだままさゆき　哲学科博士課程)